活彩!保健大学だより

AOMORI UNIVERSITY OF HEALTH AND WELFARE

第3号/平成12年12月25日発行　青森県立保健大学広報誌

海外授業（オーストラリア）の風景

CONTENTS

事務局長挨拶/小野寺事務局長 …… 2
ニュース…… 3
学生活動…… 6
サークル活動…… 9
大学祭を顧みて……10
海外授業 引率始末記……12
海外授業 同行記……14
海外授業 体験記(学生)……15
サバティカル研修……18
教室(領域・分野・職域等)紹介/看護学科……19
教室(領域・分野・職域等)紹介/理学療法学科…20
教室(領域・分野・職域等)紹介/社会福祉学科……21
教室(領域・分野・職域等)紹介/人間総合科学科目…22
教室(領域・分野・職域等)紹介/事務局 総務課……23
人事異動……24
編集後記……24

［事務局長挨拶］

就任に当たって

事務局長
小野寺伸吉

８月21日から事務局長として就任しております小野寺です。年度の中途、しかも月の中途での異動は大変珍しいことでして、これも何かのご縁だと思いますので、この気持ちを大事にして皆様方とお付合いをしていきたいと思っています。

最初に、私の経歴について簡単にお話します。

県に入って36年目になります。新採用の職場は福祉事務所で、ケースワーカーを５年間経験しました。当時は、徒歩で対象者の家庭訪問をし、1日4～10キロ歩くのも当たり前の時代で、今、比較的健康でいられるのもそのお陰と思っています。また、相手の立場に立って物事を考えるということを学んだのもその頃だと思います。

その後、他の部局等を経験し、通算しますと、福祉の仕事が19年、その他の仕事が17年となり、バランスのとれた（？）経歴となっています。

直前の職場は公営企業局というところで、水力発電により電気を電力会社に売ったり、川の水を工業用水として企業に提供したり、また駐車場や水族館の経営等、独立採算制により「商売」(周囲からはよく「水商売」と冷やかされますが…。) をしているセクションにおりました。

わずか1年４ヶ月余りの初めての経験でしたが、特に印象に残っているのは、厳しい財政事情の中で、県営浅虫水族館の入館料を今年４月から引き下げる仕事に携わったことです。入館料が高いという世論の後押しがあったものの、職員一丸となった努力が功を奏し、現在では入館者数が昨年比で約1.6倍、入館料収入は約30％の値下げにもかかわらず昨年並みで、上々の入りのようです。

展示生物やイルカショー等新たな感動を覚えるものも多いはずです。是非足を運んでみてください。

前の職場のＰＲが長くなってしまいましたが、当大学に異動になってもう4ヵ月になりました。

真新しい立派な建物や設備、構内は可能性を秘めた若者や緑がいっぱい等申し分のない環境の中におりながら、初めての教育の仕事、そしてまた生来の未熟者が今や不熟者になりつつあるということもあって、未だ慣れない日々を周囲の人に支えられながら過ごしています。

大学の使命は、有為な人材の育成にある訳ですが、特に当大学にあっては、本県が目指している「福祉日本一」の実現に向けて、保健・医療・福祉に関する専門的知識とそれぞれの連携の意識を育み、人間味あふれるケアーのできる人材を送り込むという使命があります。

この使命を果たしていくための主役は、もちろん学生の方々であり、教員の方々である訳でして、脇役である事務局としましては、それぞれの立場から何ができるのかを考えながら仕事を進めていきたいと思っています。

そしてまた、大学のキャンパスのあちこちで聞こえる若い笑い声が緊張した心を和ませてくれるように、事務局の中にもいつも笑顔があり、誰もが気軽に利用できるように、明るく親しみやすい雰囲気づくりに心掛けていきたいと思っています。

最後に、更に自分をよく知ってもらうための情報を若干提供しておきます。

苦手なもの……肉料理、アルコール

目がないもの…めん類

趣　味……スポーツの観戦(野球等)・実戦（50歳から始めた硬式テニス・最近やっていないボーリング）・映画鑑賞

ニュース

故広田捷事務局長 死亡叙位・叙勲について

平成12年6月12日御逝去なされた、故広田事務局長が、死亡叙位・叙勲を受けられました。

叙位・叙勲の区分は下記のとおりです。

◎従6位、勲5等

双光旭日賞（平成12年7月24日閣議決定）

学会開催

今年度、8月から10月にかけ、本学において以下の学会が開催されました。

今後も、本学を利用した様々な学会が開催される予定です。

（以下、①：学会長、②：学会名、③：開催日）

1 ①赤坂和雄教授
②「国際リスニング学会」
(International Listening Association)
③平成12年8月3日(木)～4日(金)

2 ①上泉和子教授
②「日本看護管理学会第４回年次大会」
③平成12年8月25日(金)～26日(土)

3 ①新道幸惠学長
②「日本災害看護学会第２回年次大会」
③平成12年8月27日(日)

4 ①赤坂和雄教授
②「日本コミュニケーション学会東北支部大会」
③平成12年10月21日(土)

1 国際リスニング学会

2 日本看護管理学会第４回年次大会

3 日本災害看護学会第2回年次大会

4 日本コミュニケーション学会東北支部大会

受賞　11月5日、理学療法学科三浦雅史助手が、第18回東北理学療法士学会（会場：青森県立保健大学）において、学会奨励賞を受賞しました。

特別講義

本学では、学科等を単位として、授業の他に学科等の分野に関する「特別講義」を年数回開催することとしています。

今年度は以下のとおり開催されました。

❶日時：6月7日㈬　会場：大講義室A1
講師：新藤信子（コンサルタント・講師として理学療法士、看護婦及び医療関係者の仕事に従事）
テーマ：「世界から見た日本のリハビリテーションと看護」
主催：理学療法学科

❷日時：9月25日㈪　会場：講堂
講師：松本茂（ALS協会会長）、松本るい
テーマ：「ALS（筋萎縮性側索硬化症）と共に生きる」
主催：看護学科

❸日時：12月15日㈮　会場：大講義室A1
講師：児島美都子（日本福祉大学名誉教授、青森大学教授）
テーマ：「21世紀のソーシャルワーカー像を描く」
主催：社会福祉学科

韓国青年代表団の本学訪問

11月6日午後1時、歓迎の横断プレートと両国国旗を手に韓国青年代表団（団長以下40名）をお迎えしました。

一行は、総務庁「日本・韓国青年親善交流事業」により来日し、滞在期間15日中４日間青森県に滞在し、本学には、本県青年との相互理解と友好を目的として訪問したものです。２時間半という短い時間でしたが、学長挨拶の後、「韓国事情と言語」を受講する40名の本学学生を４つのグループ（双方併せて20名の学生、国際科委員、通訳を含む）に分け、自己紹介や簡単なゲームによるミニ交流、ほぼ一対一による学内施設の案内と見学、そして、一同が交流ホールに会しての大交流茶話会を行いました。

たどたどしい英語や日本語での会話でしたが、一方向ではなく双方向での交流は、学生一人一人にとってとても良い経験となったことでしょう。

出発時間になっても和は崩れず、名残を惜しみながらお別れの横断プレートを掲げて見送りました。

健康科学研究研修センター研修会

本学健康科学研究研修センターでは、「組織で取り組む医療事故の防止を考える」をテーマに研修会を開催しました。

日時：12月3日㈰　13：00～15：30
会場：青森県立保健大学講堂
パネリスト：中村恵子教授（看護学科）、秋元博之助教授（理学療法学科）、岩月宏泰講師（理学療法学科）、大和田猛教授（社会福祉学科）、木幡洋子助教授（社会福祉学科）

また、上記研修会のほかに、次の３会場で行われた専門職の方々を対象とした研修会に講師派遣等を行いました。

❶日時：11月8日㈬　13：00～15：00
会場：むつ総合病院公済会館
◆勘林秀行講師：「在宅ケアに必要なリハビリテーションの視点～東通村・大間町での訪問理学療法の実践から～」
◆細川満子講師：「大間町の事例を通して、在宅ケアにおける連携について考える～在宅療養の現状と今後の課題について～」
主催：むつ保健所、青森県立保健大学健康科学研究研修センター

❷日時：11月21日㈫　13：00～15：00
会場：五所川原市中央公民館・視聴覚室
◆伊藤日出男教授：「地域リハビリテーションの実践と課題」
◆山本春江助教授：「地域の看護・介護力の研究を通して見えてきたこと」
主催：青森県立保健大学健康科学研究研修センター

❸日時：12月5日㈫　13：00～15：00
会場：青森厚生年金休暇センター（八戸市）
◆山本春江助教授：「Ｓから始めるヘルスプロモーション」
◆金谷年展助教授：「病気をつくるまち・健康をつくるまち」
主催：八戸保健所、青森県立保健大学健康科学研究研修センター

公開講座

本学公開講座委員会では、今年度、「こころと健康」を基本テーマに計４回の公開講座を開催しました。

《第１回　6月5日㈪》※本誌第２号で特集
「全人的な健やかさの意味するもの〈Healthということばの語源をたどりて〉」
講師：日野原重明（聖路加国際病院理事長）

《第２回　6月30日㈮》
「こころの健康ってなんだろう？」
講師：安田勉（社会福祉学科助教授）

《第３回　10月14日㈯》
①「子どもたちのこころはどこへ行くのだろう」
講師：田﨑博一（看護学科教授）
②「健康な精神が宿る健全な身体づくり」
講師：川口徹（理学療法学科講師）

《第４回　10月28日㈯》
①「母親のこころの健康と子育て」
講師：益田早苗（看護学科講師）
②「こころってなんだろう」
講師：入江良平（社会福祉学科教授）

なお、受講者総数は延べ858名で4回中3回以上受講した54名に修了証を授与しました。

「学生生活この1年」

（学生自治会記録）

学生自治会 初代会長
（社会福祉学科2年）
長野　正康

本学が開学して、もう少しで２年が経とうとしています。今年の４月には２期生も入学し、大学構内は、１期生しかいなかった去年に比べて、賑やかになりました。私たちにとっては初めての後輩ができ、仲良くなりたいと思いながらも、どこかで先輩として振る舞わなければ、という意識が働いてしまいました。大学となると、たとえ後輩でも自分と同い年であったり、年上であったりします。そんな後輩とどのように話し、付き合っていったらよいのか、悩んだりもしました。

さて、新入生が入学したことによって最も変わったのは、サークル活動だと思います。今年度新たに、新入生によってつくられたサークルも少なくありません。又、以前からあった運動系、文化系などのサークルに多くの新入生が入り、サークルの活動が活発になりました。新入生が入ったおかげで、対外試合ができるようになったサークルもあれば、いいライバルや、同志ができた人もいることでしょう。

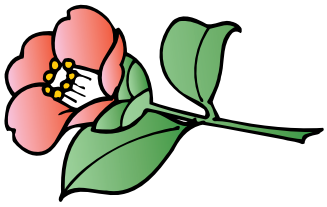
今年度行われた大きな行事としては、第２回大学祭と１期生の８月に行われた、オーストラリア研修があります。

今年の大学祭は、本格的に「大学祭実行委員会」という組織をつくり、委員長の理学療法学科１年の樋口君をはじめ、実行委員が頑張り、素晴らしい大学祭を行うことができました。大学祭当日には、多くの地域の人々が来校してくださり、大学祭を盛り上げてくださいました。今回の大学祭では、本学の学生以外を対象としたイベントが少なかったような気がします。昨年度のように、フリーマーケットや本学ならではの、応急処置教室など、地域の人々も参加でき、且つ、生活に役立つものや、楽しんでいただけるようなイベントを来年度以降企画していければよいと思いました。又、学科ごとに大学で学んでいることなどをまとめて、発表できるようになると、より充実した大学祭になると思います。

８月には１期生対象のオーストラリア研修がありました。これは、約１ヶ月間オーストラリアのメルボルンにホームステイをして、モナシュ大学に通い、英語教育のカリキュラムを受けたり、自分の専門分野の職場を見学したりするものです。希望者６４名が行きました。私は行きませんでしたが、多くの友人から話を聴きました。みんな口をそろえて、「良かった」と話してくれました。オーストラリアに住む人々の大らかさや温かさに触れ、美味しい食べ物を堪能し、オーストラリアの大自然に触れて、楽しい想い出になったのだと思います。

今回この海外研修を通して、英語でのコミュニケーションはもちろん、オーストラリア大陸という広大な大地からのエネルギー、オーストラリアの文化などを吸収して帰ってきた学生たちは、この経験をどのようにこれからの人生に生かしていくかが、これからの一人一人の課題だろうと思います。

学生自治会会長としては、他の役員と共に、会則をつくるなどの活動をしてきました。あまり積極的に活動をしてきたわけではありません。次期の学生自治会役員には、もっと活動的に様々な学内の問題に取り組み、より良い学生生活を送れるように努力していって欲しいです。



「障害者の方たちと〈ねぶた〉を楽しんで」

（介護ねぶた参加記録）

オールスターチーム代表
（社会福祉学科2年）
伊東由理子

青森の夏の風物詩、「ねぶた」。青森生まれ青森育ちの私にとって、ねぶた祭り期間は一年の中で最も熱くなれる時期です。そんな、熱く、躍動感溢れるねぶた祭りをより多くの方々に参加してもらい、楽しんでいただきたい！というのが青森っ子の願いです。しかし、実際は、障害者の方や高齢者の方が参加するとなると多くの困難が存在します。例えば、規模が大きい祭りのため混雑は免れませんので、トイレの確保、移動は安易なものではありません。それに加え、道の状態の悪さが挙げられます。車イスにとっては小さな段差やでこぼこも障害になってきます。

そんな障害をものともせず「誰でも、どこでも、どんな活動でも」をモットーとしたケア付き事業というものが盛んになってきました。発祥は徳島県の阿波踊りです。障害者の方でも高齢者でも参加したいから参加する、という当然のことが実現しているのです。そのケア付き事業の中でもかなりの規模のものと自負する「ケア付きねぶた」に、私たちオールスターチームは、昨年に引き続き、ボランティアとして参加させていただきました。今年で五回目になるこのイベントは、ボランティア200名、参加者30名という大きな組織をつくり今年も盛り上がりました。なぜ参加者30名に対してボランティアが200名も必要なのかとお思いでしょう。車イスを押すなど直接介護に関わる人、ねぶた衣装を参加者に着付けする人、ボランティアのために、そばを調理する人、車イス用のリフト付き大型車を運転する人・・・。数えればきりがありません。こんな多くのボランティアに支えられこの「ケア付きねぶた」は成り立っているのです。私たちはといいますと、ねぶた運行前に舞台にあがり、ねぶたとはこういうものだ！というのを身をもって参加者に伝えるボランティアです。要するに皆さんの前でねぶたを跳ねて見せた訳です。特に他県からいらした方が多いので、囃子に合わせて手を叩き喜んでくれました。参加者の方々の笑顔を見ていたら私たちも嬉しくなり、「もっと頑張って跳ねないと！」と調子に乗り、ますます激しく脚を上げ踊り狂いました。次の日、筋肉痛になったのは言うまでもありません。

このボランティアを通して強く感じたことは、「したいという気持ち」が保証されそれが実現した時に人間は生きがいを感じ生き生きしてくる、ということです。生きがいとは人を生きることに向かわせる動機づけのことだと思います。障害者だから‥高齢者だから‥ではなく、したいことを当然のようにできる社会を目指していきたいです。

このイベントは、今年で五回目ですので徐々にですが伝統ができてきています。来年、再来年と参加し、この「ケア付きねぶた」と共に、私たちも成長していきたいです。

ぜひ、これを見て興味を持った方は一緒に参加しましょうね！！

ねぶた運行前の実演風景

「ロシアで見たもの」

（青森県・ロシア極東地域青年交流事業参加記録）

看護学科2年
一戸恵久美

皆さんはロシアについてどのようなことを知り、どのように考えているだろうか？

私は、この青森県・ロシア極東地域青年交流事業に参加するまで、ロシアについて何も知らなかった。世界地図を広げてみてみると、青森県とロシアの近さを改めて感じることができるのだが、その距離的な近さと同等に、ロシアを身近に感じることがほとんどなかったのだ。しかし、少しでも実際のロシアを知ることができたら、と考えこの事業に参加させてもらった。

9月3日、私達はダリアビア航空H８－308便で、曇り空の青森空港を出発し、ロシアへと向かった。飛行機が滑走路を飛び出してからほんの２時間程度でロシアのハバロフスク空港に到着。福岡あたりに行くほうがもっと時間がかかるのではないかと考えてしまうくらいの近さに、「本当にここはロシアなのだろうか。」と疑いながら入国手続きをした。しかし、やはりそこはロシア、入国管理官もロシア人、何を聞かれているのかさっぱり分からず、ここで初めて自分がロシアにいることが実感できたのであった。

そしてこの日から最終日の９月10日まで、私たちは、バス、シベリア鉄道、船、ロシアの国内機など、実にさまざまな手段で、最初に到着したハバロフスク、シベリア鉄道の終着地であるウラジオストック、そしてコムソモリスク、アムールスクと、たくさんの地域をまわり、たくさんの人々と交流を図ることができた。

そのなかから、いくつかの印象的な出来事について話したいと思う。

まずはシベリア鉄道について。９月４日、私たちは憧れのシベリア鉄道に乗り、ハバロフスクの駅を出発して、シベリア鉄道の終着地であるウラジオストクに向かった。２名１室のコンパートメント車両は想像していたよりきれいな内装になっていて、エアコンがきかず蒸し暑いことをのぞけば、まるで「世界の車窓から」のワンシーンのような、星空を見ながらのゆったりした時間を過ごすことができたのだった。ホームに並ぶ物売りのおばさんから買って食べた、ピロシキやペリメニもとてもおいしかった。

次にロシアの人々について。長く続いた社会主義の影響か、ロシア人の競争心の希薄さを感じた。店に並ぶ商品はどこにいっても同じ値段で、レジは一つしかなく、たちまち長打の列ができてしまう。どうしたら他の店より儲かるかなど考える人がいないようだ。また、ロシアの大学生とも話をする機会があったのだが、彼らの今一番欲しいものが車であったり、もらっている奨学金だけでは、毎月の服代には足りないとぼやくなど、日本の学生と同じようなことを考えている様子に親しみを感じた。その反面、駅でお金をねだる小さな子供や老人の姿からは、貧富の差をみせつけられた気がした。生きるか死ぬかという貧しさに苦しんでいる人々を目の前にして、私達は何を考えなければならないのだろうか。

今回の旅で見たものは、広大なロシアのほんの一部分にすぎない。しかし、さまざまなロシアの局面を見ることができたように思う。

ロシアから帰ってきた今、思うことは、青森―ハバロフスク間の距離以上に、日本人とロシア人も、お互いのことを知り合いながら、その距離を近くして、助け合うことができたらいいということである。

コムソモリスク教育大学の学生

バスケットボールサークル

代表(看護学科2年) 山口智恵子
(顧問/講師　角濱春美)

まず、先日行われた大学祭でのバスケットボールサークルの活動を紹介します。昨年同様、２日間のうち１日は模擬店としてクレープを販売しました(模擬店名：クレープ屋さん)。もう１日は3ＯＮ３大会を開催しました。クレープ屋さんでは、完売で売れ行きは良かったです。３ＯＮ３大会では学外からの参加募集もし、地域との交流の場ともなりました。学生も学外の参加者も、とても楽しんでいたので、やって良かったと思いました。

さて、バスケットボールサークルのメンバーは、先輩・後輩、男女ともみんなとても仲が良いです。しかも、バスケットボール好きの人たちが集まっているので、みんなで活動しているときは、とても楽しいです。個性豊かな人がたくさん集まっています？！団結力も強いです。２年生が実習で忙しくても、みんなバスケットボールが大好きなので、実習日以外の日で、できるときは必ず活動しています。

学外のチームとの練習試合（交流試合）も積極的に行っています。バスケットボールサークルは、忙しい中でも活発に活動しています。これからも、みんな仲良く・楽しくサークル活動をしていきたいと思います。

サークル活動風景

World Volunteers Circle

代表(社会福祉学科1年) 榊原　敬愛
(顧問/講師 千葉多佳子、講師 ジョナン・ウォルシュ)

あなたたちはボランティアに興味がありますか？

私たちWorld Volunteers Circleは、ジョナサン先生のスピーチがきっかけでスタートしました。彼の知り合いでインドのカルカッタにて医療の勉強に励む傍ら医療ボランティア活動を積極的に行っているシーラさんという女性の、「貧しい人でも無料で医療が受けられる医療施設を作りたい」という願いの手助けをしたいと思い、私たちはサークルを立ち上げました。

現在サークルがスタートしておよそ半年が経ちましたが、その間サークルメンバーは、インドに医療施設を作る活動以外にも合浦公園の清掃ボランティアをはじめ、国際ミニシンポジウムで青年海外協力隊の方の話を聞き、大学祭でインドカレーの出店とインド写真展を企画しインドの紹介を行い、他大学と情報交換や勉強会を開いて交流を深めています。また、地域ボランティア活動にも参加させてもらっています。

これからも、人との交流・地域との交流・心の交流を中心に考え、サークルメンバーが様々な活動の役割を分担し、一人一人が責任をもってサークル活動を積極的に行っていきます。

「ボランティア」と一言で言ってしまえばとても簡単ですが、その内容は多種多様です。ボランティアに興味を抱きやってみたいと思った時こそ、あなたのボランティア活動はスタートするのです。

他大学との交流（青森公立大学大学祭にて）

「わ」から学んだこと

（大学祭開催記録）

大学祭実行委員長
（理学療法学科1年）
樋口　大輔

今年の春、第２回県立保健大学祭の実行委員会のメンバーが結成されました。集まった当初は、１年生の私が実行委員長を務めることになるとは夢にも思っていませんでしたが、現在では実行委員長をやったことで非常に様々な能力（統率力、情報把握力）を高められたし、企業の方々との交渉を通して社会勉強をすることができたのでよかったと思っています。具体例で紹介したいと思います。

まず「統率力」についてですが、実行委員会で、大学祭の骨格（＝方針）を決定する場合には、多くの委員の意見を聞いたりすることで専制的な決定を避けることに注意していました。しかし、学生の意見を十分に反映できなかったのは今年度の反省すべき点です。（すべての学生の意見を集約することは実質不可能ですが…。）

次に、「情報把握力」についてです。実行委員長の仕事を通して、組織の長が持つべき重要な能力であると実感しました。本学は新設校ということもあり、まだ実行委員会のマニュアルが定着していないため、非常に情報が混乱しました。様々な判断を下す際、情報の混乱によって非常に苦労しました。例えば、模擬店の部屋割りで複数の模擬店が同一の場所に重複していたりしました。

また、ほぼ大学祭の計画が仕上がり学長先生に報告に行った時に社会勉強になったと感じました。というのは、学長先生以下多くの先生や職員の方々は、私を実行委員長としてだけでなく、一人の

バスケットボールサークルによる3on3大会

社会福祉学科1年生による「焼き屋さん」

「社会人」として対応をなさっていたからです。

ここでの「社会人」とは20歳以上というものではなく、学外で責任を持って企業と交渉にあたる者という意味で使用しました。大学祭の趣旨説明を行う席で特にそのことを感じました。

現在、実行委員会は、来年度に向けてマニュアル作成活動をしています。このマニュアルが完成することで来年度は今年度以上に円滑に実行委員会の運営ができるはずです。

今年の大学祭のテーマは「わ」でした。実行委員会では、今後の保健・医療・福祉は地域に密着したものでなければならないと考えました。大学祭を機に地域住民との「わ」を大きく広げることができれば、という願いがこのテーマには込められています。しかも、これは本学の目標にも合致するものです。大学祭を終えて、今年度のテーマが十分に達成できたかというと、実際はそんなにうまくはいきませんでした。しかし、十分に本学の学生に問題提起はできたと思っています。今後の学生の成長、ひいては本学の発展へとつながれば幸いです。

実行委員会の担当者を代表して、物品管理者の社会福士学科１年下平英範君に実行委員会の仕事から学んだこと等を紹介してもらいたいと思います。委員会の立場とは異なったものの捉え方をしてもらいました。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

私の実行委員会としての仕事は、物品を管理し、

大学祭当日の受付風景（大学祭実行委員会）

各模擬店及び企画の皆さんに有効に物品を使ってもらう仕事でした。大学祭事体、去年が初めてのことだったそうですが、２回目となる今年も、実行委員会には去年大学祭を運営した人たちが一人もいなかったため、すべてが手探りの状態でした。

物品もその例外に漏れず、なかなか難解な仕事がたくさんありました。例えば、物品を大学祭当日に管理する事が出来ずに、貸し出すことになったことでした。そしてそのことで、実行委員長や事務の方に迷惑を掛けてしまいました。これが、今回の大学祭での物品管理で一番難しいところであり、失敗したところだと思います。しかし、こういう失敗も今年ちゃんと反省して来年のために生かしたいと思いました。

このこと以外にも、難しいことはたくさんありましたが、学んだ事もたくさんありました。まず、学内各教室の鍵の借り方を覚えたことや通常の学生生活では余り経験しない事をやったことです。このことにより、これからのキャンパスライフでは、各教室の鍵を借りる時や、教務学生課に行く時に自信を持って行動が起こせるようになったと思います。

次に、サークルなどの代表の人はほとんどが先輩の人でしたが、何人かと知り合いになって人間関係が豊かになった事です。この中には、教務学生課の人や色々な場面でお世話になった人も含みます。このように人間関係が豊かになると、ますます学校生活がより良いものになるような気がします。

また、この文章はパソコンで打っていますが、実行委員としてよくパソコンを使ったおかげで、前よりパソコンが分かったし、早く打てるようになりました。

このように、物品管理をやっていても学ぶことはたくさんあり、忙しかったけど、実行委員だった頃はとても有意義な時間を過ごしたような気がしました。

実行委員の仕事は、物品管理以外にもたくさんありましたが、どれも大変な仕事で、責任ある仕事であると思いました。そういう仕事を一緒にやってみて、実行委員の人とはとても仲良くなったような気がしました。これも、実行委員をやってみての一つの財産だと思います。実行委員の人には、物品管理などの仕事の遅れを手伝ってもらったりして、散々迷惑を掛けてしまいました。すいませんでしたと謝りたいくらいです。しかし、迷惑は掛けながらも、実行委員として活動していた頃は、とても自分が積極的になっているような気がしました。仕事が終わらない時は夜９時まで学校に残って仕事をし、それでも間に合わない時には、自分の家に帰ってまで仕事をやっていました。世間というか、社会では常識のような話ですが、自分の中ではとても積極的に動いていたと思います。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

最後に、今年度の第２回大学祭は我々大学祭実行委員会のメンバーのみでは開催できなかったと思います。多くの協力してくださった先生や職員の方々のサポートなしでは大学祭の成功は考えられませんでした。この場をお借りしまして、御礼申し上げます。

これをもちまして、今年度の大学祭の報告を終わります。

食文化研究会による“べこもち”実演販売

海外授業

第1回海外授業引率始末記(オーストラリア)

人間総合科学科目教授
ノエル・フクシマ
(English Communication担当)

ピリピリカリカリ

搭乗案内を待ちながら心配係の横山教務学生課主幹が「あらゆる突発事故を想定して」作成してくれた諸々のパンフ類をパラパラとめくっていると、中にパスポート情報一覧というのがあった。参加学生の氏名、本籍、生年月日、旅券番号等々、16項目を網羅した完璧なる一覧表である。パスポートの発行年を見ると64人中48人が今年に入ってからの取得だ。４分の３が海外旅行初体験といったところか。「わたしの中学時代の夢って、いつか国際空港のロビーをスーツケースをゴロゴロ押しながら歩いてみたいってことだったの」と教えてくれたのはだれだっけ。いいなあ、若いってことは。半数以上が20歳前だ．．．待てよ、ということは、魔の17歳はつい昨日のことだ。おい頼むよ、カルチャーショック昂じて衝動的行為に走らないでくれよ。あ、もうピリピリしてる。

空の上のハッピーバースデー

そうだ、衝動的行為予防には共感的人間関係、ラポールの確立だ、学生と我々引率教員との間の。おっ、誕生日が今日の子がいるぞ。よっしゃ、機内誕生パーティーから始めよう。ということで、ケーキ、ローソク、カードを空港売店で買う。乗務員にお伺いを立てると機長の判断一つだと言う。成田発シドニー経由のカンタス航空QF022便は夏休みとオリンピック間近のせいで満員である。「ローソクに火をつけるのは危険、まかりならん」と言われるに違いないと思っていると、あにはからんや、ディナーの後ならOKという解答が返ってきた。頃合いを見計らって大声をあげた。他の乗客に黙認してもらうためにも、ここは英語でやる必要がある。記念すべき20歳の誕生日である。
“ Ladies and gentlemen, someone has turned 20 today. It's our Natsuko. Happy birthday, Natsuko! ”ローソクに火をつけ、みんなでHappy birthday to youを歌った。「乗務員一同からのお祝いです」とシャンパンが一本届けられた。その多くは飛行機に乗るのも始めてという21世紀の看護士、理学療法士、社会福祉士たちの期待と不安を乗せてジャンボジェットは赤道を越えた。

Happy Birthday. Natsuko!（機内で、後方筆者）

今すぐ帰りたい

本学での英語演習が終って半年以上経ってからの海外英語実習である。その間何らかの形で独自に英語学習を続けていた学生はほんの一握り。後は「何もしなかったので全部忘れちゃった」。それがメルボルンに着いたその日から文字通り英語を使わなければ生きていけない状況に突入するわけである。３時半に授業が終わるとホームステイ先に直行し、翌朝まで英語英語英語。「何を言ってるのか分からない」「どう言ったらいいのか分からない」「でも逃げることはできない」。誤解曲解が頻発する。朝友人の顔を見たとたんに、緊張から解放された安堵感から泣き出してしまう学生もいる。カルチャーショックといわれる不安定な精神状態は、語学力の不足よりは、異文化にどう対処すべきか分からないでいる状況、すなわち自分たちが今まで持っていた価値観や規範を早急に修正しなければならない状況に置かれた時の緊張感不安感から来る場合が多いのだが、頭痛腹痛便秘生理不順不眠症が襲う。ホームシックが忍び寄る。「ああ、考えが甘かった、何が何だか分からない、海外研修なんか参加するんじゃなかった、今すぐにでも日本へ帰りたい、帰って思いっきり日本語でしゃべりたい、ケータイ会話がしたい、青森が恋しい」
そんな学生たちに対して我々引率教員がしてや

れることといえば、登下校時、休憩時間などに学生たちを観察し、緊張した顔、落ち込んでいる顔を見つけたら、何気なく話しかけ、話を聞いてやり、励ましてやることぐらいしかないのである。

Oops, I skipped a line!（授業風景）

じょっぱれけっぱれ

最初の１週間が過ぎた。2、3の偶発事故もあったが、この頃から学生の表情や態度から緊張感が消え始めた。が、まだ大多数はリラックスできず、「ナントカガンバッテマス」という顔をしている。しかし、２週間目の終り頃には「おはよう」「バイバイ」という声にも明るさが感じられるようになった。ホストファミリーや教師にも慣れ、日本とは異なる習慣やルールにも慣れてきたに違いない。

３週間目が勝負だった。というのも、本学の前期試験の結果が９月１日に発表されるからだ。もしまだリラックスできないでいる学生が試験に落ちるという不幸に見舞われたらどうなるか。多分、カルチャーショックとのダブルパンチで後半戦を有利に闘うことができなくなるに違いない。ドロップアウトが出るかもしれない。衝動的行為や突発事故が発生するかもしれない。ピリピリ。

前期試験の結果多くの犠牲者が出た。しかし、そんな結果をある程度予測していたのか、一瞬暗くなった学生たちの表情も数日で元に戻った。３週間目にしてオーストラリア的楽観主義を身につけたのか、はたまた津軽のじょっぱり精神か。授業がおもしろい、食事がおいしい、ホストファミリーが優しい、週末が楽しい、といった前向きの報告をしてくれるようになった。学生たちは、ホームステイ先、モナシュ大学の英語センターや看護学部のスタッフ、AACE担当者、バスドライバー等、みんな自分たちに楽しく有意義な毎日を過ごせさせたいと努力しているなあ、ということを感じとった。相互信頼が醸成された。やれやれ。ピリピリも若干静まった。

ところが、３週目半ばに突然伏兵が現れた。予期せぬファックスが届いたのである。「以下の14名は再試前に面接がある。日程は９月18・19日。詳しい時間は帰国後各自のメールを見ること」という内容である。これは困った。海外研修も最終コーナーの４週目にかかろうという大切な時である。ショックが当該学生に与える影響が懸念される。帰国後にメールを見よと言ったって、青森到着は17日（日曜）である。そのまま大学へ直行せよというに等しい。なぜ面接をするのかの説明さえない。青森で自分を待っている運命は何なのか。14人のうち半数は県外出身者。成田から出身地へ向かう予定だった者もいる。カリカリ、カリカリ。よし、少なくともこの週末だけは平穏に過ごさせよう。発表を翌週まで延期することにした。月曜日、掲示板の前に不安顔が並ぶ。ピリピリ、ピリピリ。おい、やけを起こすでないぞ。けっぱれ！

日本へ帰りたくない

やはり異文化に挑戦し、カルチャーショックを果敢に乗り切った学生たちはやわではない。伏兵の攻撃もうまくかわしたようだ。忍耐力がついた。そして、オーストラリア人との交流から、コミュニケーションはことばの問題ではなく心の問題だということを学んだ。緊張をほぐしてくれた教師のSmile。ホームシックを忘れさせてくれたホストのHumour。言いたいことがどうしても伝わらず絶望的になったときのホストマザーのHug。気がついたらことばの壁を気にせずにコミュニケートできるようになっていた。帰国の日、ホストファミリーと心を通わせた学生は「もうひとつの家族ができてうれしい」「いつか絶対戻ってくる」とその思いを語り、心を通わせすぎた（？）学生は「もっといたい。日本へ帰りたくない」と訴えた。

We'll miss you.（さよならパーティー）

海外授業

第1回海外授業同行記

人間総合科学科目助手
川内　規会

「English Communication」海外授業にふれて

出発日、意気揚々と免税店の前で
（前列右から2人目が筆者）

Melbourneでの４週間を終え大きな問題もなく事故もなく、計画どおり無事に終了できたことに対して、正直なところ私は安堵の気持ちで一杯です。64名もの大人数の学生を授業で送り出すのは初めてであり、また、受け入れ側の学校も初めてという独特な緊張感の中、同行しましたが、ホームステイ等現地の受け入れ体制はしっかりしていたようです。

授業の面では、各学科に関係する施設訪問、学外研修、現地学生と一緒の専門授業や講義等、ふんだんに含まれており、贅沢な機会ではありましたが、その分本来の語学学習の時間にしわ寄せがあったように私は感じました。このあたりのプログラムに関しては来年に向けて検討の余地があるように思われます。

また、海外へ足を踏み入れる前の事前研修の重要性と、学生の目的意識をもった履修が大切である事を強調しておきたいと思います。

今回、私に課せられた仕事の一つに報告用の写真撮影があり、そのため毎日学生と動きをともにしながら、学内生活、学外研修、自由時間から、土日のオプショナルツアーまで写真を撮り続けました。学生の生き生きとした姿（のみならずexhaustedな姿）をとらえながらも、彼らと対話をしていると、不安からくる相談内容が日に日に変化していくのが手にとるようにわかりました。

また、個人的に各クラスの先生方とも頻繁にコンタクトをとらせていただき、全クラスの授業も拝見、観察させてもらいました。学生の真剣な(？)眼差しを見て安心していましたが、たまにクラスの授業をお手伝いすることになったり、講義の説明やオプショナルツアーにも通訳させられるなど、心の準備なく突然に驚かされる事も多々ありました。（突然というのはまさにオーストラリアらしいですね）

学生の皆さんお疲れさまでした。今回の体験を将来にわたってプラスであったと感じる日が来る事を願っています。

人間総合科学科目助手
廣森　直子

学生の授業に参加して

今回、私が担当した役割の１つに音声の録音があり、毎日出ていたクラス４の授業や学生たちの会話などをテープレコーダーで録音してきました。現在、録ってきた大量のテープの内容をチェックしています。テープには、初めてホストファミリーと過ごした日の翌朝、「日本へ帰りた～い」と喚く学生の声がしっかりと記録されていました。理由は「家に帰るとずっと英語を話さなければならないから」。もっとも、4週間後には「まだ日本に帰りたくな～い」という声に変わっていましたが。

授業に出ていて感じたことは、やはり積極性が一番大切ということです。相手に伝えたいと思うことを伝えるという行為をせずに済ませてしまう、なかなか伝わらないので伝えることをあきらめてしまうという様子が時折見かけられました。

クラス４での最終テストは、4人ずつのグループに分かれ、10分程度のdialogueを作成し、発表するというものでした。テスト当日の朝、その課題が告げられたので学生たちが準備するのに使えたのは数時間のみでした。しかし学生たちの発表はユーモアを交えたすばらしいもので、テスト終了後、担任の先生であったRhonddaが“I was very surprised!”と頬を紅潮させていました。

ところで、オーストラリア滞在中、私が最もびくびくしたことは、常時持ち歩かされていた携帯電話（学生からの相談、スタッフ間の連絡用のもの）が鳴ることでした。一番慌てたのは、銀行のカウンターで両替している真最中に事務局の横山氏からかかってきた、海外授業参加者の再試験願提出者の確認についてのお電話でした。…オーストラリアの携帯電話は重かったです(いろいろな意味で)。

先生のRhonddaとさよならパーティーにて（右が筆者）

看護学科2年
佐々木絵梨子

母子家庭における父親の役割

ある土曜日、ホームステイ先の庭で

「オーストラリアの家族の半分が離婚している」

施設見学でこの言葉を聞いて私はとても驚いた。日本と比較してオーストラリアの離婚率が高いことは知っていたが、これほどまでとは思わなかった。そして、私がお世話になったホワイト一家もまた母子家庭であった。三人の子供を持つ母親、私はその家族に仲間入りした。

まず驚いたのが母子家庭であるはずなのに、一週間に三〜四回と頻繁に父親がやってくることである。離婚したことはホームステイしてすぐに聞かされていたが、それなのに二日のうち一日は父親が来るのはすごく不思議な感じがした。私は離婚した夫婦というものはもっと仲が悪いもので、日本のように離婚した後は必要時以外会わなかったり、同じ空間にいることを拒否的に考えるのが普通だと思っていた。その父親はホストマザーが忙しいときに家に来て夕食を作り、子供たちが寝静まった後に帰っていた。夫婦そろって親しく会話する様子は見受けられなかったが、険悪な雰囲気というわけでもなかった。そして父親が来た時の子供たちはとてもうれしそうで、まるで父親を取り合っているかのようだった。確かに日本の方が離婚する家族は少ないが、その分オーストラリアでは離婚後、子供たちにできるだけ寂しい思いをさせないように、子供たちと一緒の時間を共有しようという配慮がなされていて、それに比べたら、実際は日本の方が寂しい思いをしている子供が多いのではないかと思った。離婚そのものに対する考え方の違いもあるだろうが、日本とは少し異なった家族観であると思った。

看護学科2年
野澤めぐみ

まだ現役のAT車

私は出発前に「オーストラリア人は物をとても大切にする」と聞いていた。だが実際を見ると、日本人の私からすれば物をとても大切に「し過ぎ」に見えた。

私のホストマザーは27年目のＡＴ車に乗っていた。ドアには穴があいていて、窓はきちんと閉まらなく、サイドミラーの上下には小さく折りたたんだ紙を挟んでミラーが落ちないようにしていた。ハンドルはとても重くて片手では回せず、ギアの所には手書きで「Ｐ・Ｎ・Ｄ・２・１」と書いた紙が貼ってあった。車内にいるにも関わらず風や雨にうたれているうちに、オーストラリアには車検がないのか、なぜ古い車がこんなにも多いのか、などといろいろ考えるようになった。

それはオーストラリア人が倹約家（ケチ？）だからという理由ではなくて、「恥」という要素の影響が弱いか強いかが関係しているのではないかと思う。日本は「恥の文化」と言われるように、日本人は常に他人にどう見られているかを考え、いつも心のどこかに「恥」という感情を持ちあわせている。私はたとえ日本の車検に合格しても、ホストマザーの27年目の車を自分の物として所有したいとは思わない。古いだけならまだしも壊れそうなところに私は恥の意識を持った。

「恥の文化」の日本人が良いとか、オーストラリア人が悪いなどと白黒をつける気はさらさらない。だが、ただ単に、同じ自動車に何十年も乗り続けることは、ごみの減量に一役かっていて、その上環境にもやさしいのだろうと感じた。

ホームステイ先の家と車

海外授業

第1回海外授業体験記(学生)

理学療法学科2年
中村　明夫

元気な1人暮らしのホストマザー

9月15日、最終日のFarewell Party
(ホストマザーと筆者)

8月20日、成田からおよそ16時間余り、ようやく目的地のモナッシュ大学に到着、ホストマザーに紹介された。体格の良い優しい感じで、その後一緒に買い物や食事をしながら、私は少しづつ打ち解けていった。彼女は65歳、思った程広くはない家に一人暮らしだと知ったが、もう一人香港からの留学生がステイしていて、彼女の料理を三人で囲む夜が多かった。食事のあとはテレビを見ながらの彼女との会話が楽しかった。真面目なクリスチャンで、聖書の話を良くしてくれた。彼女は慕われる性格で、非常に多くの友達を持っていた。毎日、二人分の食事作りや弁当づくり、それに送り迎え。年齢から考えると相当負担になるのではないかと思われたが、彼女は疲れも見せずに滞在中、それを続けてくれたのだった。高齢者の多くなるこれからの社会で、彼女のような自立した老婦人が健康に生きる姿は素晴らしいことだと思う。パソコンや車の運転もこなし、学生のお世話もしながら、いつまでも生き甲斐を持って生きる彼女の姿に、年を感じさせない強ささえも感じられて、語学の修得とともに人の生き方も勉強させてもらえたのは今回のホームスティの大きな収穫であった。一度、彼女に今までの人生で達成した最大の仕事は何かと訊ねた事があったのだが、彼女は三人の息子を育て上げたことだと答えた。それを聞いたとき、彼女を心から尊敬出来た。９月17日、午前零時。彼女はもう休んでいるであろう。北へ向かう飛行機の窓の下に広がる果てしなく黒い南太平洋を見ながら、彼女にはいつまでも元気でいて欲しいと願った。

理学療法学科2年
成原　知

家庭での子どもに対する教育､躾

自分が感じ取ったことは、誉める教育であるということ、許容範囲が広いということである。決して押し付けの教育ではなかった。誉められることで子供がもっと努力しようとしたり、周りへの気配りを始めたりと、誉められる度にプラス方向への成長が、わずかながらでもあるように感じられた。当然悪いことをしたら叱るが、叱られた弟を兄が抱きかかえ、慰める光景などは、少なくとも自分の兄弟間では考えられないことで、心にぐっとくるものがあった。ただ、価値観の違いからであるのだろうが、自分にとっては怒るべき行動と思える場合でも、普通に笑って済まされてしまうことがあり、初めはそのことに対して不信感を抱いてしまったが、生活していくうちに許されるべく行動とそうでない行動との境界線が見え始め、これがこの家庭のやり方であるということが理解でき、自ずとその環境に適応できるようになった。初めは否定的に捉えがちだったが、これが相手との価値観や許容範囲の違いであり、それぞれが違うのは当然のことで、自分と違うからといって相手を容易に否定してしまうことは良くないと反省した。自分と違う考え方に出くわしたとき、自分に基準を置き、自分を正当化し、相手が間違っているかのように考えがちで、特に外国においては、この国では、という偏見に陥りやすいため注意が必要である。

違う世界に足を踏み入れることは、それだけ当惑や不安を経験する機会は多いが、今まで気付かなかった自分発見の最高の機会である。

帰国見送り風景

社会福祉学科2年
宇佐見大輔

オーストラリアのソーシャルワーカーについて

ホームステイ先のペットのジョージ（オーストラリアで唯一の友達です）

今回の海外研修では、英語力の習得のほかにオーストラリアの医療・福祉システムについてのカリキュラムが組まれていた事に大変満足している。特に、現地スタッフの話を聞く事ができたのは実によい経験だったと思う。その中で感じた事は、やはり日本の社会福祉とオーストラリアのそれとの大きな差であった。社会福祉に対する国民の理解や、社会福祉の専門職であるソーシャルワーカーの社会的地位の高さなど、見るもの聞くもの全てが自分にはまさしく衝撃であった。

日本の場合、ソーシャルワーカーの歴史が浅いという事もあってか、まだまだ社会的地位は低く、また社会的にも認知もされておらず、何よりその専門性がいつまでたっても確立されていないのが現状である。本来、福祉を第一線で支えていかなければならないはずのソーシャルワーカーが、極端に言うと有名無実のものである限り日本の福祉が世界のレベルに達する事はないだろう。同時に、これからの福祉社会を支えていく担い手には、到底なり得ないはずである。

こうして考えてみると、実際に現場に出る前に、日本の社会福祉の課題を再認識できた事は、これからの自分にとって大変意義のある事だったと思う。ただ、その突き付けられた課題というのは、当然自分にも課せられた課題なのだという事を忘れてはならない。そういった意味でも、今回得た知識というものは、必ずやこれからの自分を支えてくれる大きな力となるはずである。またいつの日か、このオーストラリアという国で福祉を学びたいと心から思う。

社会福祉学科2年
下山智沙都

多文化を肌で感じて

「オーストラリアはマルチカルチャーである。」話には聞いていたがこのことを実感したのは自分のホストマザーがドイツ人だと知った時だった。はじめのころ私はマザーと二人きりで向き合う時間がこの上もなくつらかった。彼女が話し掛けてきてもまず質問が分からない。あるいは理解することができても答え方が分からない。一生懸命コミュニケーションをとろうとしてくれているマザーに申し訳なく思っていると、彼女は自分がドイツ人であること、自分がオーストラリアにきた時のことをゆっくりと話してくれた。第二次世界大戦後、彼女は家族と亡命してきたらしい。ドイツの国語はもちろんドイツ語であるため、亡命直後はＨｅｌｌｏとＢｕｔｔｅｒしか英単語を知らなかったのだそうだ。私が見た限り、いまでは英語に不自由をしている様子はまったくない。きっと大変な努力をしてきたのだろうと思う。ホームステイ初日に遊びにきたマザーの兄に言われた言葉が今でも忘れられない。「何でもいいから話しなさい。話さなければ私たちは何もできない、理解しようとすることもできないよ。」これも彼女たちが、言葉の通じない異国でつちかったことなのだろう。そんなマザーはかなりのドイツひいきでもある。食べるもの、着るもの、食器、音楽など、できるだけドイツ製のものを買う。今でもドイツ語はペラペラで同じドイツ人の兄とはあえてドイツ語で会話するそうだ。オーストラリアも愛しているとはいうものの、離れている祖国への愛国心は変わらないらしい。

今日も彼女はドイツの歌を聴いていることだろう。

マザーとその兄。手に持っているのはシドニーオリンピックの開会式のチケット

Physiotherapyって、なに?

理学療法学科教授
伊東日出男

ロンドンで研修(観光？)中の筆者

今年６月から３ヵ月間の海外研修の機会を与えられたので、世界で最も理学療法の歴史の古い英国で地域理学療法について勉強してきました。場所はイングランド南西部のブリストルとロンドンです。沢山の知識と経験を得て無事帰りましたが、今考えると冷汗ものの失敗もありました。

初夏のロンドンからブリストルへと列車の旅は快適でしたが、うっかり乗り越してウエールズの首都カーデフまで行ってしまいました。K教授による事前のレクチャーや旅行案内書からの情報で漠然と知っていましたが、カーデフでは英語よりもウエールズ語が大きく表示されているのを確認しました。何となくカーデフに魅力を感じて、休日に再び美しいお城と博物館を見学に出かけました。すっかり満足しての帰りに、今度は列車の乗り方を間違えて、ロンドンに近いスウィンドンまで乗ってしまいました。夕暮れのホームでブリストル行きの列車を待っていた時には、さすがに心細い思いをしました。

ブリストル大学の語学センターで「Physiotherapistって、何ですか?」と、数人の日本の女子大生から英語で質問を受けたことがありました。答えに窮していたら、イラクから来た中年のクラスメートが、「俺が説明してやるよ」といって適切に表現してくれたのには驚きました。日本ではいかに「理学療法士」が知られていないか、また自らの英語能力の低さを思い知らされて情けなくなりました。

理学療法を英語で Physical Therapyと言いますが、英国圏では Physiotherapyと呼ぶのが一般的です。Oxfordのポケット辞書には physioやphysiotherapyという語は載っていますが、physical therapyという言葉は載っていません(ちなみに、rehabilitationやrehabilitateはあっても、rehabiliという語は載っていません)。英国に住んでいる人は、誰でも英語を話すものと思っていたように、物事の一面しか知らないのは不幸なことだと実感した次第です。

イラク人の友人は、サダム・フセインの圧制から逃れてイランにやってきて、12歳から働いていたそうです。また、ホテルで知り合ったイスラエルの中年ご夫婦からイスラエルの事情を聞くと、初めて相手の国や文化に対する実感が沸きます。短期間でしたがこのような外国生活の中で、自分は何のために英語を学ぶのか、を真剣に考えました。英語を通して世界のいろいろな人々と知り合い、異なる文化を知ることによって相手を理解することができます。そのことが、ささやかながらも、結局は世界の平和に貢献するのではないか、と思うようになりました。英語は、そのための手段なのだと。

この夏、オーストラリアで生きた英語を学んできた学生諸君は、どのように考えているでしょうか。

デイホスピタルの転倒予防教室
ロンドン・ボイリングブローク病院にて

母子看護学講座（助教授/大関信子）

当講座は、母性看護学と小児看護学が一緒になったものです。人間は生まれてから母親に愛され成長する間に、母性を育んでいきます。母性とは、赤ちゃんをみて、「ワー、可愛い」という感激から始まります。やがて、人を愛し結ばれ、新しい生命を宿すという過程の中で、新しい生命を愛し大切に思う心を育て、出産後は、赤ちゃんを慈しみ育てていくことができるようにサポートするのが母性看護の原点です。そして、新しい生命をどのように健やかに育てていくか、病気になった時のケアはどうするかが小児看護学の領域になります。健康な小児は健康な母親から生れます。母性看護学と小児看護学とが一体となっているゆえんです。

母子看護学講座の授業や演習は、1年次と2年次で学んだすべてのことが基礎となった上に授業や演習が展開されます。したがって、基礎がいかに大切かということは言うに及びません。また、母性看護学や小児看護学の対象となるヤンママ・ギャルママたちを理解すべく、時代に乗り遅れないように、できる限り社会の中に身を置き、敏感に世の中の動きをキャッチする必要もあります。ベビーブームの時代に比べ、現代は少子化の時代と言われ母子看護学講座の影が薄くなっています。が、健康な母親から健康な子供を生み育てることは、明日の健全な日本社会を築く根幹であると考え、私たち母子看護学講座の果たす役割は、多大なものがあると自負しています。

母子看護学講座は、開学初年度から精力的に研究に取り組んでいます。「青森県における乳児死亡率の要因分析と対策の検討」「助産婦のメンタルヘルスケア能力育成のための卒後研修について」「高校生の育児能力育成の研究」「女性の母性性、育児観、母性行動における母娘間の伝承性と社会環境の影響性について」を共同研究テーマとして取り組んでいます。今年度の第41回日本母性衛生学会で「助産婦のメンタルヘルスケア能力育成のための卒後研修について」の研究発表が終わり、高い関心を得ています。これら母子看護学講座の共同研究の他に、大関助教授は「異文化ストレス」「更年期のケア」益田講師は「乳幼児虐待」、吉川講師は「幼児のバイ菌概念」、田中助手・玉熊助手・高橋助手は「母親の育児不安」という個人研究テー

マを掲げ、日夜研究に取り組んでいます。もちろん、すべての研究の総元締めは新道教授です。 長い研究・教育歴と全国津々浦々に及ぶ人脈のおかげて、私たちはいろいろな面でサポートしていただいております。学長職という多忙な中で、母子看護学講座の大黒柱としての役割を果たしておられます。

来年度は、母性看護学と小児看護学の授業と演習、実習が始まります。限られた時間とマンパワーのなかで、最大の教育効果を上げるべく、今から戦略を練っております。来年度から、中村由美子助教授と佐藤愛助手を迎え、新たなパワーが加わり、研究に、教育にと最大限の力を出していきたいと思います。本講座の講師や助手の先生方は、個性豊かでそれぞれユニークな才能を持っています。それぞれの才能が一体となった時、すばらしい力が発揮され、学生の教育にもすばらしい効果が発揮されると信じています。

＜母性看護学領域＞

教授：新道幸惠

助教授：大関信子　講師：益田早苗

助手：玉熊和子、高橋佳子、佐藤 愛(13年度から)

＜小児看護学領域＞

助教授:中村由美子(13年度から)

講師：吉川由希子　助手：田中克枝

リハビリの陽は西から昇った！

（助教授/江西一成）

九州のリハビリ関係者は標記の言葉に秘かな自負を持っています。その特徴は、きわめて実践的・臨床的なところといえるでしょう。そのような九州からやって来た私は、現在、航空宇宙医学領域から派生したHead Up/Down Tiltという姿勢変化に伴う循環動態を研究しています。一見、リハビリ医療や理学療法とは関連性の乏しい印象を受けるかもしれませんが、決してそうではありません。私たち理学療法士は、様々な疾患や外傷などで臥床状態（無重力または微少重力下）を余儀なくされている方を再び重力下に戻そうという職種であり、しかも、重症であればあるほどその必要性が高まります。つまり、両者の間には密接な関連があるのです。

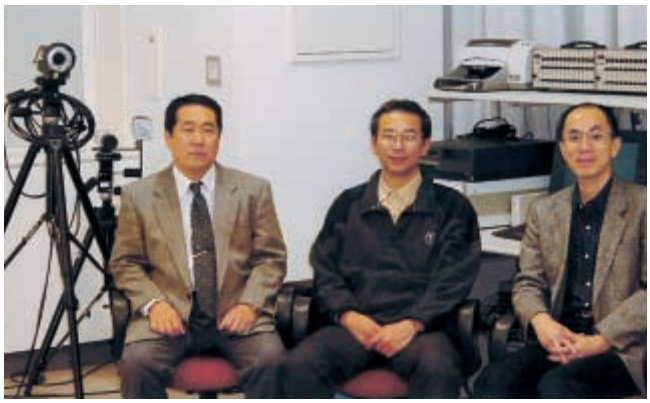
現在はまだ若年健常者を被験者としている段階ですが、それでも一回拍出量が30～40％も変化することに驚きを覚えています。これらのことは生理学的には当然のことなのですが、同時に、あらためて理学療法の意味を考えさせられてもいます。

今後は、このような方向性で研究を進展させ、理学療法の実践的・臨床的とは、いわゆる専門性という些細な枠組みにとらわれない骨太な理論に支えられていることを示したいものだと考えています。

「脳と運動」の問題から理学療法を考える

（講師/岩月宏泰）

中枢神経疾患の運動障害や子供が運動を習得していく過程を観察することは大変興味深い。その魅力に惹かれこれまで、中枢神経疾患を対象に立位姿勢反応の分析や筋電波形解析を通して、脳損傷部位による運動の拙劣さを理解してきた。しかし、通常、随意運動が発現する際には運動の実行に至るまで幾つかの過程を経るが、これまで行ってきた手法では運動を制御する脳の機能を間接的にしか捉えることができなかった。ところが最近、神経解剖学の視点から「脳」の細胞構築的研究を始めることとなった。これまで行ってきた運動障害の定量的測定と脳の細胞構築的研究を重ね合わせる事で、複雑な系である神経系の構造と機能についての理解を深め得ることが可能となる。このような勉強を進めることで、新たな理学療法技術の開発につなげることが出来ればと考えている。



運動学実習室にて。左から佐藤講師、江西助教授、岩月講師

世界に誇る青森の自然に触れながら身体運動を考える

（講師/佐藤秀一）

昨年、自然豊かな青森に赴任してから八甲田山、十和田湖花鳥渓谷、奥入瀬渓流、そして世界自然遺産！白神山地をよくワンダリングする。そして環境教育の理学療法への展開に強い関心を抱くようになった。自然に触れながら、レイチェル・カーソン「センス・オブ・ワンダー」の一節、『知ることは感じることの半分も重要ではない（自然の美しさ、生命の大切さに気づく感性の重要性）』を思い浮かべる。

身体運動を三次元動作解析装置を用いて計測すると、どのような力学現象が起きているかを知ることができる。そして解析をすすめながらふと思う。はたして関節モーメント（筋が発生する関節まわりの回転力）を軽減させるような動作が、必ずしも心理的に負担感が小さく快適で容易な動作であるのだろうか。高精度な計測装置から知ることと、運動を行っている人間自身が感じることの双方に根拠を置きつつも、心身二元論を越えた多次元からの解析モデルの提案ができればと思う。

青森が世界に誇るブナ林を五感を使いながら歩いていると、感性工学の発想から物理量（力学データ）と主観量（心理データ）を基に身体運動の意味を考えようと思った。

心理学分野

日本心理臨床学会にて
（助教授/安田　勉）

日本心理臨床学会が京都文教大学で開催された。学会といえば、研究発表等の他に、多くの旧友に会えることや新たな友人に出会うことが楽しみの一つなのだが、今回は「自主シンポ」を開催した。テーマは「児童福祉施設における心理臨床家の役割」である。70人入ればいっぱいの教室に、立つ人が出る程の参加であった。数年前であれば数人の参加があれば良いほうであったが、隔世の感である。児童養護施設において心理療法を担当する職員を配置することが可能になったことが、その要因として考えられるが、いずれにしても、社会福祉の領域に多くのしかも若い心理臨床家が関心を持ち、関わり、子どもたちの生活や発達に寄与して頂けることはなんとも心強い。多くの仲間に出会えた思いで帰途についた。

尚、専門領域は、児童臨床心理学。担当科目は臨床心理学、カウンセリング論、児童心理、障害者心理などである。

生理心理学分野
（助手/鈴木保巳）

「21世紀は脳の世紀」「脳－人類に残された最後の研究フロンティア」という言葉を耳にしますが、私も脳の持つ機能の多さ・複雑さに魅せられて、心理学と脳生理学の境界領域である生理心理学を専攻するようになり十数年がたちます。ヒトの心的機能は脳の情報処理活動によって営まれています。つまり、私達が様々な環境の中で適応した行動がとることができるのは、環境の感覚・知覚から注意や意識といった認知の過程を経てそれに適した行動反応を出力するといった情報処理の過程を支える脳のおかげです。様々な議論のあるところですが、脳あっての人間と私は思っています。

脳に傷害が及ぶと、情報処理活動が妨げられ様々な行動上の障害を引き起こしますが、私は脳波という電気的指標により「行動上の障害」と「心的情報処理活動の障害」との因果関係を解明することを通して、障害者（高齢者を含む）の理解に少しでも寄与したいと考えています。何故ならば、脳活動の妨害要因とそれが因果している情報処理過程が明らかになれば、それを補う教育・福祉・医療・リハビリテーションの援助法の開発に結びつくと考えるからです。

人間が人間であるために不可欠な「脳」、この神秘なる物体の機能解明に興味のある方、また、障害援助の心理学的・生理学的根拠に興味のある方、一緒に研究してみませんか。

イメージと象徴
（教授/入江良平）

心の働きはおよそ人間の活きる営みの全域に関るものなので、その心を対象とする心理学はまことに多様です。動物実験や神経生理学的実験が中心でほとんど理系といっていいような領域から、深層心理の解釈といったほとんど文学という領域にいたるまで、およそ異質な研究活動が同じ屋根の下に共存しています。その中で私が専門としているのは「イメージ」と「象徴」です。イメージ研究の大先達（と私は思っていますが）であるユングという心理学者は、自然発生的に現れてくるイメージの中には神話や宗教に見られる典型的なモチーフが含まれることを見出し、それらが人類に普遍的な無意識過程を指し示しており、心のこの層が私たちの生活の背景をなしていると考えました。そこで私は彼にならい、心理療法場面で現れてくる空想イメージを検討するという作業に従事しています。それは日常的な心理とはかなり異なる世界で、グノーシス主義とか錬金術といった一見するとあまり心理学的ではない素材にも首を突っ込まねばなりません。なにしろ多様な人間の心、そうした側面もまた意味があるにちがいないと思って研究を続けています。

システム理論の思考と論理

（講師/鞠子英雄）

医療系大学での細分化された専門領域を学生たちが学んでいる時、「一体、自分は何のための勉強をしているんだろうか」と、学問の全体的視野が見えにくくなってくることがある。そうした視野狭さくは、昨今の医療ミス事故を振り返るなら、特に人間の生命を対象とする分野では放っておけない問題である。

人間総合科学科目の授業の存在理由は、まさに、迷宮に陥った学生たちを、全体が見渡せる広場にいったん連れ戻す役割にある。思考のパラダイムで言うなら、細分化された知識の諸断片を、ボトム・アップ思考を介して相互連結しつつ、その相互連結をどういった視点から統合するかといったトップ・ダウン思考をも同時にめぐらしながら各々の「学問領域間の構造的相関マップ」を学生たちに教示しようというのが大きな目標である。

例えば、私が担当している、「システム理論の思考と論理」を取り上げて説明しよう。システム理論は、異なった領域の間にアナロジーを介して共通な統合された領域が隠されているかもしれないという仮説のもとに、その統合された領域の発見のための方法論を提供する。その意味で各々の学問領域間の構造的相関マップを作成しようとする意図がとりわけ強い。今、私は、群集生態学という分野と人間の家族関係の在り方との相関について研究している。両領域が一見全く異なるように見えるが、システム理論の視点で捉えると両領域のつながりが見えてくる。拒食症、うつ、慢性疾患（アルコール依存症、糖尿病）といった病がなかなか良くならないのはどうしてなのだろうか。しかも、患者個人に対して徹底して様々な治療を試みているにもかかわらず、思うように回復しないのはどうしてなのか。この問題にかかわるきっかけがあった。教え子が十数年前、分裂病を発症したことに始まる。現在も、たくさんの薬、デプロメール、ドグマチール、アモキサン、SSRI、といった向精神薬を飲み続けながら一進一退を繰り返しているのが現実である。まじめで将来を期待されていた彼の家族関係について聞いてみると、典型的な強い絆で結ばれた母子一体化の家庭であった。母親は今でも子供が分裂病であることを認めず、子供と一緒に病院へ行って専門医の話をただの一度たりとも聞いたことがない。

群集生態学で生物種の間で食う食われるのネットワークが絡み合い複雑になればなるほど、そのシステムは崩れやすくなるという理論がある。調べていくうちに、家族内で個人に精神的な症候群が出現する時、一致して、家族間のつながりが、この生態系のように入り組んでいて複雑な相互連結がベースになっていることを知った。よく言われる、親子間の強い絆という関係は、決して健康なメンタルシステムを維持しないことも分かった。彼が一向に良くならないのは、どうやらこうした対人的相互作用が強い家族関係がベースにあって、この不安定な状況をどうにかして一時的に安定な状況へもたらそうとする戦略として、子供の病を認めないとか、病院へも行かない、そして強い絆による母子一体化の関係を保とうとしているのではないか。

群集生態学では、一見複雑に入り組んでいるネットワークでも、よく見るといくつかのグループに分断されていて、複雑ゆえの不安定さを回避している。それではどういった相互連結の在り方であれば個人に病を出現させずに安定化できるのか。それについてのヒントを群集生態学での生物種のつながりのルールに求め、現在、数学モデルを考えながら研究している。

教室（領域・分野・職域等）紹介　＜事務局/総務課＞

（総務課長/長谷川俊行）

この保健大学だよりに事務局が初めて登場します。事務局は総務課、企画情報課、教務学生課の三課から構成されていますが、広報委員会から今回は総務課の自己紹介をしていただきたいとの有り難い要請がございました。

この機会を利用し、総務課長である私が、総務課の実像に迫りその謎について皆様にお知らせいたします。

1、総務課とは？

組織はある目的をもっています。そこにはいろんな職種の人がその目的に向かって職務を行っています。その中で、総務課の役割とは、そこで働く人々がいろんな意味で安心して職務を遂行できる環境づくりを行うことだと考えています。

2、具体的にどのようなことをしているのですか？

総務課のイメージとしては、一般的に給与とか旅費の支給にかかる業務や施設管理の業務が思い浮かぶのではないでしょうか。

そのほかにもさまざまな業務がありますので以下、簡単に述べたいと思います。

〇職員の健康診断等健康維持や福利厚生に関する業務

人間ドックの要望やリフレッシュするための保養施設紹介等の相談に応じます。

〇研究費等の物品の発注業務

これは、毎日、相当量にのぼります。

〇広報業務

県立大学である本学は、特に、県民の理解を得ることが必要であり、そのためには大学が今何をしているかを情報提供していく必要があります。

〇環境整備

大学校舎内外がいつも清潔で学内を訪れる誰もが心地よい思いを持つように清掃や植栽等の環境整備を行なっています。

〇施設見学者への対応

県内外からマスコミや議会関係、保健・医療・福祉関係者等多くの見学者が訪れます。このことは、本大学を理解してもらう大きなチャンスですので、笑顔で親切な対応を心がけています。

〇大学予算の要求・執行・管理業務

予算を扱うためには相当の専門知識が必要です。また、財政難のなかでの予算要求には相当のエネルギーが必要です。また、予算の管理と予算の適正な執行に努めています。

〇その他

教職員が公務員として遵守しなければならないルールの周知や交通事故防止等についての喚起を行うほか、その他、雑多な多くの仕事を行っています。

学生との関わりでは、保健室は総務課の分掌事務ですので、体調を崩した時には気軽に保健室を利用していただきたいと思っています。また、これから寒くなりますが、暖房等、安心して授業が受けられるよう、陰から皆さんを応援しています。

3、皆さんにお願いすることはありますか？

今まで述べた仕事を遂行する上で、総務課では皆さんにいろんな書類提出を求めます。その度に、書き直し等を要求され融通の利かない面倒な存在とお思いの方もいらっしゃるでしょう。

大学の運営費はすべて税金から支出されています。どうか、ここのところをご理解下さい。

4、総務課の人は事務的で人間性が感じられないのですか？

そんなことはありません。スタッフ全員紳士、淑女です。人格高潔、思慮円熟です。加えて、豊かな人間性を備えています。

しかしながら、仕事量が多くなると、頭脳もぐちゃぐちゃとなり時々失敗があります。そんな、総務課の面々ですがこれからもよろしくお願いいたします。

《総務課職員紹介》

課　　長	長谷川俊行
主　　幹	白戸一郎（庶務）
主　　幹	大谷順一（庶務）
総括主査	苫米地満（経理）
主　　査	毛内　博（経理）
主　　事	鹿内亮一（経理）
主　　事	古林素子（庶務）
技能技師	千葉　雄（公用車運転）
保健嘱託員	津内口恵子
臨時事務手	小笠原こずえ(学長秘書)
臨時事務手	八戸史子(庶務補助)
臨時事務手	長内未央子（経理補助）

人事異動

＜新任・転入等＞

理学療法学科 病理学教授

吉村　教暻　（ヨシムラ　ノリアキ）

病理学は病気の原因と機序を調べる学問です。原因がわかれば治療法も見つかる筈です。昔、患者さんを診ていて治らないのでこの道に入り30年になりました。一般臨床医学も担当します。宜しくお願いします。

看護学科 助手

佐藤　寧子　（サトウ　ヤスコ）

４月に弘前に引っ越してきて、ご縁があってお世話になることになりました。あたらしい生活、環境と文化と人、そして教育に緊張している毎日です。

＜転出等＞

太田庸起子（看護学科教授）
中村　博文（看護学科助手）

編集後記

《活彩！保健大学だより》第3号をお届けいたします。20世紀最後の号となります。年２回発行のペースになりそうな雰囲気です。21世紀末には203号発行となる予定です。203号にはどんな記事が載るのでしょうか。

今回の特集はEnglish Communication 海外授業です。異文化に触れることで、新たな自分を発見するなど一回り大きく成長した様子が記録されています。若い学生諸君の元気をもらい、教職員も元気で新しい世紀を迎えたいものです。

本号からニュース欄を設け、大学関連ニュースの要点を掲載することになりました。教室等紹介の欄は２回目になります。

本誌をより良いものにするために、皆様の忌憚のないご意見をお聞かせ下さるよう御願いいたします。　（広報委員長／竹森幸一）

◎広報委員会委員
竹森幸一、羽入辰郎、勘林秀行、八戸　宏、伊藤貞一
◎専門部会（広報記録担当）
井澤弘美、田中克枝、佐藤秀一、田中志子
◎事務担当
大谷　順一（対外広報担当）、
工藤　　光（入試広報担当）、
佐々木真也（学内広報誌､広報委員会事務担当）

編集・発行／青森県立保健大学広報委員会（〒030-8505 青森市浜館字間瀬58-1 TEL017-765-2007）

バックナンバーはＵＲＬをご覧下さい。URL/http://www.auhw.ac.jp/